

平成 27 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	北広島町立八重小学校	校長氏名	神川 義紀	生徒指導主事氏名	吉川 孝志
-----	------------	------	-------	----------	-------

取組事例名 『校内駅伝大会』

取組のねらい『キーワード 異学年交流』

本校では、毎年、12月初め、全児童による校内マラソン大会が行われる。学校行事ではあるが、児童会（6年生）を中心に事前・事後の取組を行っている。下学年にとっては「ぼくたち、わたしたちも大きくなったら、あんな風に走りたい（がんばりたい）。」というあこがれの対象を具体化させ、なりたい自分をイメージさせるのに役立ち、上学年にとっては、「自分たちがチームみんなをまとめて引っ張っていくんだ。」という責任を自覚させ、取り組ませることで、自己有用感や自己肯定感の向上につなげていく。

取組の具体的内容『キーワード 学校のリーダーとして』

縦割り活動班の「やえっこ班」を活用し、12チームを作る。全15区間を、高学年区間0.9km、中学年区間0.7km、低学年区間0.6kmに分ける。校庭のトラックを使い、そこから校外に飛び出していく形でコースが設定しており、区間によって折り返し地点などが遠くなったりしている。校庭のトラックでは、各チームの児童が自分のチームの応援をしており、学校の外では、保護者や地域の人たちがランナーに声援を送っている。各折り返し地点やコースの要所には職員を配置し、選手の誘導や安全の確保、声かけなどを行う。「やえっこ班」は毎日の掃除にも活用しており、異学年であっても、顔と名前が一致する利点がある。チームを12に分けることで、1チーム平均2.5人6年生（30名）が入ることになる。6年生のほとんどの子がキャプテン、副キャプテンの責任を負うことになる。残り6名は、特別支援学級（情緒）2名、不登校傾向児童2名、2学期からの転入生2名であり、応援などのチームサポートの役割を担っていた。欠員が出た場合は、原則同じ区間を走る学年の児童が2回走るようになっている。

1区（中学年）⇒2区（高学年）⇒3区（中学年）⇒4区（低学年）⇒5区（高学年）⇒
6区（中学年）⇒7区（低学年）⇒8区（中学年）⇒9区（低学年）⇒10区（高学年）⇒
11区（中学年）⇒12区（高学年）

取組の課題・創意工夫『キーワード 本音の出し合い、安心する』

駅伝大会の本番半月前くらいに、チーム結成式を行う。主には、6年生が考えてきたチームのキャッチフレーズや目標をみんなで共有することを目的とする。もう一つ、駅伝大会に向けて自分が不安に思っていること、心配なことをその場で出し合う。その不安や心配に対し、6年生を中心とする高学年が自分の経験を語りながら、解決方法や気持ちの持ち方をアドバイスする。例えば「長い距離を走るのが苦手で遅いから、あまり駅伝大会に出たくない。」という1年生の悩みに対しては、「私も1年生のとき遅くてチームのみんなに迷惑かけたように思ったけれど、走り終わったらチームのみんなが『よくやったね』『頑張って走ったね』と言ってくれてすごくうれしかった。順位じゃなくて最後まで一生懸命走ることが大切なんよ。それができればいいんじゃないか。一緒に頑張ろう。」と高学年が返してくれる。自分がチームのみんなにしてもらってうれしかったことをもとに高学年は声かけをしてくれるので、説得力がある。また、個々の不安や悩みを6年生が把握することで、チームごとの練習段階からそれに配慮した声かけが可能になってくる。チーム結成式の後は、大休憩や昼休憩を使い、たすき渡しの練習や持久走などの練習を本番まで各チームで行った。

取組の成果（効果）『キーワード 絆』

駅伝当日、欠席者0名、早退者1名、遅刻者1名（通院）、骨折などによる見学者3名。6年不登校傾向児童2名完走、運動が苦手な児童も多数完走。校庭ではチームの6年生を中心に大きな声で声援を送る。コースに立っている教職員はもちろん、沿道の保護者や地域の方々からも大きな声援をもらい、子どもたちの頑張りは最高潮に。大きな拍手とともにチームメイトに迎えられ、みんないい笑顔に。その中でも、高学年特に6年生の頑張りは素晴らしい。病気やケガで走れなかったチームメイトのために、たとえ走るのが苦手であっても2区間走る姿は、下学年の児童の目に焼きつき「自分たちも大きくなったら、あんな風に走るんだ！」という絶好のモデルケースになる。また、6年生を中心とした高学年は自分たちの頑張りに対し、下学年や教職員、地域の方からももらった声援が自己有用感や自己肯定感を高め、新たな活動への自信と意欲づけになる。走り終わった後は、チーム毎に記念撮影をし、駅伝大会を通しての反省会を行った。

今 後 の 展 開『キーワード 継承』

駅伝大会後に撮影した写真は、6年生が卒業するとき、各班のメンバーが6年生に寄せ書きをする色紙の中心に貼る。日々の掃除などでの縦割り班活動にいつそうまとまりが見られるようになる。今後は、6年生というモデルを胸に、各学年がよりよい自分、集団をめざして活動をしていく。特に、3学期の「6年生を送る会」に向けて、感謝の気持ちを込めた出し物を考え、本番では各学年が今後の学校生活における決意表明をしていく。

他校へのアドバイス『キーワード 異学年交流のパワー』

異学年交流が学校の核になっていくと、素晴らしい伝統が築き上げられていく。先輩の頑張りを見て、後輩がその姿を見て頑張る。さらにその後輩が先輩の姿を見て頑張ることを繰り返していくうちに、先輩の壁も少しずつ高くなり、さらによいものをめざして取り組んでいくようになる。このプラスの連鎖が異学年交流のパワーの源であり、物事を前向きにとらえ、一生懸命に取り組む児童の育成に役立つものだと思っている。